

第13回 地域肝炎治療コーディネーター教育セミナー議事録

日時：平成29年1月26日（木） 18:30~20:00

場所：ホルトホール大分 3階 「大会議室」

テーマ：「肝炎患者の掘り起しのための工夫」

総合司会：大分大学医学部附属病院 消化器内科 荒川 光江先生

講演1(15分) 座長：大分県厚生連鶴見病院 肝臓内科 大河原 均先生

「当院でのC型肝炎感染者の状況」

演者：新別府病院 肝臓内科 香川 浩一先生

掘り起しを目的として、当院においてHCV抗体検査を施行した症例を調査した。

2014年1月から2015年12月までHCV抗体検査を行った11252検体、9086症例を対象とした。全症例の陽性率 4.2%で、平均年齢は74.5歳であった。科別の陽性率 救急 5.2% 整形 3.0%、眼科 6.8%、2年間の検査回数は、1回が85.7%、2回が11.6%、3回が2.3%、4回が0.4%、5回が0.1%であった。陰性転化例 3人で、陽性転化例3例で、1例が40歳女性で、新規感染者と考えられた。他の施設の陽性率は、大阪市立大学 陽性 5.7% 陽性者の電子カルテのメモ欄に肝胆膵内科に紹介している。岡山大学は陽性率2.3%であった。電子カルテで受診を促すアイコンを自動表示

まとめ：2年間のHCV抗体検査 4.2%、測定数の多い。救急・ただ救急で抗体陽性をフォローは困難、電子カルテに抗体陽性を示すアイコンが自動表示。肝炎シールでの掘り起し。肝炎対策基本指針の改訂が行われ、医療機関は、肝炎ウイルスの結果について、患者に確実に情報提供しなければならない。最近3カ月間のHCV抗体陽性の検討では55名で、既往例でC型肝炎であることを知っている21名、HCVRNAが陰性である16名は除き、残りの18名に電話連絡した。身体状態は梗塞、認知症、寝たきりが多かった。受診者は現在3名であった。また抗体陽性55名のうち、HCCについては、加療中3名、HCCなし34名（半年以内の画像検査）、HCC不明は18名であった。結語：当院でのHCV抗体 平均年齢は74.5歳と高いカルテチェックをして連絡すべき人を決めている。

質問：本田先生：電子カルテを用いてアラートシステムで消化器内科に受診勧奨するか医師がチェックして個々で連絡するのがどちらがよいか？

香川先生：迷っているところである。チェックして電話する方がきてくれるのではないか。岡山大学、大阪市立大学は抗体陽性に全て手紙をだしている。

本田先生：医師がチェックして、出したほうがよいと思う。肝炎コーディネーターが入って、こまめにやればよいのではないか。

香川先生：こまめに実施したほうがいい。半年ごとに実施している。

大河原先生：電子カルテに組み込まれた方で効率が高い。バージョンアップの時にできればいいのではないかな。

清家先生：電話での連絡で肝炎コーディネーターはどれくらいの負担がかかっているのか

工藤さん：救急が多いので、カルテをみて電話をして、転院しているか、半年毎なので1日、2日でなんとかできる。スムーズに受診できるようにしている。カルテをみて本人だけでなく家族に連絡するかどうか決める。ソーシャルワーカーもからむとのこと。

講演 2(15分)座長：大分赤十字病院 肝胆膵内科 成田 竜一先生

「肝炎治療コーディネーターから肝炎医療コーディネーターへ」

演者：大分県福祉保健部 健康づくり支援課 秋月 敬子先生

大分県の肝炎総合対策について

① 肝炎総合対策推進事業の概要について資料により説明があった。

肝炎治療受給者数発行状況について資料により説明があった。

肝炎治療医療費助成にかかる様式の改正及び個人番号利用の開始について説明があった。

(改正様式はホームページに掲載)

② 肝炎医療コーディネーターについて

今後、国から肝炎治療コーディネーターの養成・活用について考え方が示される予定。

それを踏まえて、活動目的や内容、役割、養成に対する方針など県として平成29年度に要綱を定める予定。

③ 身体障害者手帳の認定基準の見直しについて

資料により説明があった。

質問

成田先生：肝炎分野、薬が新しくなり今後の国からの肝炎コーディネーターは保険点数で加味されるかどうか？

秋月先生：加味されるかどうかの情報はまだおりてきてない。

清家先生：重症化の事業に関して、大分では不十分ではないか？申請等が面倒で、実施診療では広がっていない。今回の指針の改定で、定期検査に関して年に1回、6000円が3000円に軽減されるようですが、具体的に県が取り組んでいる事はあるのか？

秋月先生：申請にあたってのフローが煩雑。今後上記の事が決まってきてから、また情報提供していきたい。

本田先生：2016年度の「肝臓」によれば、大分で受験者B型肝炎は全国1位
C型肝炎は全国2位である。検査は多いが検査をしたことを知っている人は3分の1しか
いない。肝炎シールを現在している。ほとんど今は普及していない。行政が主体となって肝
炎シールできるのはどうか？

秋月先生：肝炎シールに関しては、何かできることがあれば、そこはまた教えていただき
できることがあればお手伝いしたい。

本田先生：行政の方から調剤薬局に肝炎シールを提供して行ってほしい。大分県の初の試み
なので、是非肝炎シールはやっていきたい。

秋月先生：御協力があれば検討していきたい。

全員参加のディスカッション(60分)

司会：清家 正隆先生

コメンテーター：大河原 均、成田 竜一、香川 浩一、本田 浩一、織部 淳哉
遠藤 美月、荒川 光江 所 征範 各先生

テーマ：「肝炎シール普及」

① 佐伯 杉谷診療所の方

医師がお薬手帳を見たときに、最初のページをみない。抗体ができていない方は書きましょ
うかと答えたら、拒否される。母子手帳からお薬手帳に反映はなかなかされない。オペをし
た人で自分が抗体陽性かどうか知られていない。医師にも肝炎シールに関して情報提供し
てほしい。

清家先生：肝炎じゃない人に是非貼ってほしい。医師についての説明も必要ですね。

② 豊後大野市民病院 看護師の方

毎回、外来の看護師スタッフが変わるから意思疎通が難しい。あらゆる部署に肝炎シールの
存在を知ってもらうべき。

③ 宇佐市役所の保健師

シールが余ってしまい、なかなか進まない。新別府病院ではシールをとりあえず配る。検診
センターで検診の時に肝炎シールを入れればいいのだが、
今検討中である。

清家先生：肝炎ウイルス検査結果通知書に肝炎シールを添付すればいいのではないかと。

④ 大分医療センターの病棟看護師の方

ドクターに対する働きかけが必要である。

遠藤先生：初めてのスタッフの方で肝炎シールを見たことがなかった。消化器内科だけでな
く他科の先生にも肝炎シールの存在を知ってもらう。

清家先生：患者さん、ドクターともに存在を知ってもらえるようにする。

⑤ 三好循環器

患者さん自身が忙しい中、B型肝炎、C型肝炎両方の検査までいってない例もある。年齢が若いとお薬手帳を持っていかない人もいる。

清家先生：透析はチェックしている。お薬手帳にはこだわらない。貼れるものがあれば何でもよいと思う。カルテの表紙に工夫。(B型肝炎 C型肝炎患者は水色マーカーでチェック)

⑥ 臼杵市役所の方

APUの学生は採血をして、全てに検査している。外国の方で陽性が多いとのこと。

臼杵は陽性の方は保健師の方から電話できるようになっている。

臼杵では40代未満の方は人間ドックが無料でできる。そこで、B型肝炎 C型肝炎検査は必須でしている。そこで、肝炎シールを貼ってもらっている。

清家：臼杵は本当に進んでいるので、今後もよろしくお願いします。

今日は皆さんお疲れさまでした。新別府病院の工藤さんのコーディネーターの活動は素晴らしいです。皆さんの活動の参考になると思います。

また、香川先生の調査、県の秋月さんの報告も、大変参考になりました。協力病院、行政と連携し、大分県から肝炎が根絶できるように協力していきましょう。

(文責 清家正隆)